

その土曜日、7時58分

2008(平成20)年9月18日鑑賞〈ソニー・ピクチャーズ試写室〉

★★★★★



監督＝シドニー・ルメット／出演＝フィリップ・シーモア・ホフマン／イーサン・ホーク／マリサ・トメイ／アルバート・フィニー／ローズマリー・ハリス／ブライアン・F・オバーン／マイケル・シャノン／エイミー・ライアン（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2007年アメリカ映画／117分）

……インパクトのあるケッチイなタイトルだが、その中身は迫力あるサスペンス・スリラー兼、家族の中に見る人間の性^{さが}と確執！ パーフェクトなはずの宝石店強盗計画は、あの誤算、この誤算から意外な展開に。そして、家族が崩壊していく中、何ともすごい結末が……。『十二人の怒れる男』（57年）のシドニー・ルメット監督84歳の45作目は、すごい傑作。こりゃ必見！

「あの名作」の、あの監督が、84歳で！

7月31日に観たロシア版『12人の怒れる男』（07年）は息詰まる陪審ドラマの他、12人の陪審員それぞれの人生と被告人の少年の人生に深くコミットした迫力ある人間ドラマだった。その原版が、今から50年以上前の名作であるシドニー・ルメット監督の『十二人の怒れる男』（57年）。

シドニー・ルメット監督は、私がこれまで観た作品だけでも、『セルピコ』（73年）、『オリエント急行殺人事件』（74年）、『ネットワーク』（76年）、『評決』（82年）、『NY検事局』（97年）、『グロリア』（99年）などを半世紀以上にわたって撮り続けてきた巨匠で、1924年生まれのは現在は84歳。『その土曜日、7時58分』は、そんなシドニー・ルメット監督の45作目というからビックリ。

この作品は2007年度ニューヨーク批評家協会賞などたくさんの賞を受賞したとのことだが、その深く重たいテーマは、完全に玄人好み……。

冒頭シーンにビックリ！ このため「R-18指定」に！

映画の冒頭、アンディ（フィリップ・シーモア・ホフマン）がベッドの上で美しい女性を相手に、バックの体位で激しいファックシーンに挑んでいるシーンがリアルに映し出される。あれ、この映画はサスペンス・スリラーではなかったの？ と一瞬目を疑ったが、まずは84歳のシドニー・ルメット監督のこんな過激なサービスに感謝。もっとも、その感謝の対象は、夫の求めに応じて美しい肢体を見せてくれる妻ジーナを演じるマリサ・トメイに対してであり、メタボリック症候群を完全に乗り越えた、フィリップ・シーモア・ホフマンのっ腹はどちらかというと見たくない……？

自ら倦怠期の夫婦と言っているアンディが、久しぶりに妻ジーナとの間でこんな激しいエッチが実現したのは、現実から逃避して某所にバカンス（？）に来ているため……？ アンディは一見誰もがうらやむ優雅な暮らしをしている会計士だが、そのウラには一体どんな苦悩が……？

奇妙なタイトルは？

この映画の原題は『Before The Devil Knows You're Dead』というサスペンスタッチだが、邦題は『その土曜日、7時58分』という奇妙なもの。さて、その意味は……？

映画冒頭の激しいセックスシーンの次に映し出されるのは、強盗当日のリアルな強盗シーン。目だけを出し、顔をすっぽりと覆った強盗犯は、手馴れた様子で店に入ってきたばかりのおばちゃんを銃で脅し、現金と宝石を袋に入れていた。しかし、銃社会に馴れたアメリカでは、おばちゃんといえども反撃能力は大したもの。ショーケースのガラスを割ることに熱中し、おばちゃんへの注意をおろそかにした強盗犯の背中に、見事おばちゃんが発射した銃弾が命中！ おばちゃんも強盗犯の銃によって撃たれたものの、やっと立ち上がって玄関から出ていこうとする強盗犯に向かって、強盗犯が落とした銃でズドンとやったから、強盗犯は玄関のドアごと店外に吹っ飛ばすことに。店の中での銃声を聞き、さらにドアから吹っ飛ばされる強盗犯の姿を見届けたハンク（イーサン・ホーク）は、慌てて車を走らせながら、「何てバカなんだ！」と自分を責めたがもう後の祭……。

さて、このおばちゃんはい体誰……？ そして今、車を走らせているアンディの弟

ハンクが、強盗の実行犯ボビー（ブライアン・F・オバーン）と共にこの宝石店への強盗に及んだのは一体なぜ……？ もちろん、邦題の『その土曜日、7時58分』とは、この宝石店で銃弾がぶっ放されたその時間。

「ガラガラポン」が面白い

「ガラガラポン」をネットで調べてみると、「(くじの入った箱を振ったり回したりして、くじを振り出す音から) くじ引きで決めること。また、すっかり入れ替えること。組織の人員配置などを最初からやり直すことにも用いる」とある。もっとも、私にとって「ガラガラポン」はマージャンのパイをかき回したうえ再びセットする風景をイメージした言葉だが、日本では「政界再編」の意味でもよく使われる。しかし、それに限ったわけではないから、いろいろな領域で便利に使えるはず。そう考えれば、この映画もガラガラポンの映画という表現がピッタリ……？ それは、最初に強盗のシーンを提示したうえ、後は時間軸をバラバラにシャッフルしながら、強盗の動機とそれに至る人間模様を描くものだから。

冒頭の激しいセックスシーンには日時が表示がなかったが、次の強盗シーンには「強盗当日」という日の表示がなされるし、その後も「強盗3日前」とか「強盗4日前」とかの表示がなされるから、これによって観客は、いったんバラバラにされた時間軸を頭の中で整理することができる。ところで、なぜシドニー・ルメット監督はこんな風に時間軸をバラバラにして、各ストーリーを展開するの？ それはもちろん、それがシドニー・ルメット監督ならではの映画づくりのテクニクだから……。

ハンクもボロボロ！ アンディもボロボロ！ その中での計画は？

日本では、離婚に伴う養育費の支払いが時が経つにつれてうやむやになる確率が高いが、権利意識の強いアメリカではそうはいかない……？ そんなことを実感させられるのは、週末を娘と過ごしたハンクに対して、離婚した元妻のマーサ（エイミー・ライアン）が厳しく滞納した養育費の支払いを迫るシーン。たしかに、マーサのいうことはもっともだが、会うたびに「カネ！カネ！カネ！」と言われると、いい加減男はウンザリするはず。

こんな風に今ボロボロになっているハンクに対して、えらく冷静に宝石店への強盗話を持ちかけたのは兄のアンディ。リッチな生活をしているはずのアンディが、一体

なぜ……？ シドニー・ルメット監督はそれを詳しくは描かないが、映画全編を通じてチラチラと示される情報によると、アンディの勤めている会社に国税局の調査が入ることになったところ、そうなればアンディが帳簿をごまかし会社の金を使い込んでいることがバレてしまうらしい。したがってアンディは、早く金を入手しその手当てをしなければならないのだが、しっかり者の兄(?)としては、デキの悪い弟に対して強盗の必要性についてそこまでの説明義務は認めていないよう。つまり、アンディはいつものように(?)ハンクに対して、「俺の言うとおりに動け」と要求するだけだから、ハンクが迷ったのは当たり前。しかし、結論はアンディが予想したとおりのゴーサイン。だって、ハンクには他の選択肢はないのだから。

そんな風には実はボロボロ状態のアンディだが、頭のいいアンディが立てた計画はパーフェクト。すなわち、①強盗に入るのは、何と兄弟の父チャールズ(アルバート・フィニー)と母ナネット(ローズマリー・ハリス)が経営している宝石店、②奪うのは週末にプールされているはずの売上げ金と在庫宝石類一切の約60万ドル、③宝石店はその被害を100%保険で回収できるから両親の実害はなし、④強奪した宝石類の故買は20%の価格で既に手配済み、⑤したがって、この強盗は簡単で、デキの悪い弟が実行犯でも十分可能。そんな計算だったが……。

なぜボビーが？ なぜ銃が？

このように、アンディが立てた強盗計画はパーフェクト。もっとも、私が少し違和感を覚えたのは、アンディの顔は地元で知れわたっているから、「実行するのはお前だ」といとも簡単にハンクを実行役に指名したこと。だって、何をやらせてもダメなハンクに、いくら簡単といえども強盗の実行役がホントにつとまるの？ 微に入り細に入った具体的な指示と数回の予行練習をしなければ、強盗の実行は難しいのでは？

そんな私の心配をよそに、ハンクは強盗の実行計画をボビーに打ち明けたばかりか、実行当日はボビーが妹と一緒に住んでいる家まで迎えに行ったから、あれれ……？

こんな風に兄弟以外の第三者を強盗の実行計画に参加させることを、アンディは承知しているの……？ ハンクが実行犯を依頼したボビーはそれにふさわしく(?)、「俺はこの道のプロだ」と自任しているうえ、ちゃんと銃まで持参していたから、ハンクはビックリ。「銃の使用は控えるように」と今さらハンクが言ったところで、ボビーがそれを聞くような男でないのは当然。しかして、自信満々に銃を持って強盗の実行

犯として店の中に乗り込んでいったボビーの想定外の姿がこの映画の2番目のシーン。すると、ボビーの銃弾によって死んでしまったあのおばちゃんは、実はアンディとハンクの母親ナネット……。

父と息子の確執は？ 長男と次男の確執は？

他方、悲しみに浸りながらナネットの葬儀に参加したアンディは、「くそ！ 死んだのがオヤジだったら良かったのに！」と口走っていたが、さてそのココロは？ 妻ジーナと共にしばらく父親チャールズの家滞りしたアンディが、ある状況下ではじめて父親の本音を聞いた後、車の中で妻ジーナに対して見せる苦悩とは？

父と息子の確執、長男と次男との確執、アンディ家にはこんな深刻な家庭問題が潜んでいたことを、観客はここではじめて実感させられるはずだ。それにしても、さすが『十二人の怒れる男』のシドニー・ルメット監督。こんな人間のココロの奥底に潜む微妙な心理のヒダの描写はピカイチ！

『痛いほどきみが好きなのに』に続いて、イーサン・ホークが情けない役に

この映画でハンクを演じたイーサン・ホークは、『トレーニング デイ』(01年)でアカデミー賞助演男優賞にノミネートされた名優。しかし、私の印象に残っているのは、この手の若者に手厳しい私の教育的観点にもとづいて星3つという厳しい採点をした、『痛いほどきみが好きなのに』(06年)における、『痛いほど好き』だけでは恋愛の成就是ムリ！』という若者像(『シネマルーム19』351頁参照)。

そんなイーサン・ホークがこの映画では強盗決行直後の情けないシーンや、実行犯として連れだしたボビーが死んでしまったため、その義兄のデックス(マイケル・シャノン)から1万ドルを要求されてオロオロする情けないシーンなど、情けない男の代表のようなシーンがいっぱい。スクリーン上で観る俳優像が必ずしも実像と一致しないのは当然だが、高倉健が絶対的にカッコいいのは、長年にわたってスクリーン上で形成されてきた、寡黙で一途な男の生きザマのおかげ。

そう考えると、イーサン・ホークにとってこんな情けない若者像が定着してしまうのは、俳優人生にマイナスなのでは……？

アンディの危機対応能力は？ その1

プレスシートによると、「この挑発的な物語のキャスティングにあたり、シドニー・ルメットが一番にリストアップしたのがオスカー俳優のフィリップ・シーモア・ホフマンだった」とのこと。それを、なるほどと思わせる達者な演技を見せるところが、『カポーティ』（05年）でアカデミー賞主演男優賞を受賞したフィリップ・シーモア・ホフマンの実力。

この映画はかなり手のこんだサスペンス・スリラーだが、ある意味では成功を収めた1人の有能な会計士アンディの挫折、転落物語。アンディがなぜ会社のカネを使い込んだのかという動機は伏せられているが、それはきっと美しい妻ジーナを満足させることを含めてアンディがミエを張った生活に固執したため……？ 国税局の調査に合わせてタイムリーに至極簡単な宝石店強盗を兄弟で実行すれば、それでアンディもハンクも万々歳。アンディはそう計算し、自信をもって計画実行に臨んだはずだが、残念ながらその実態は……？

映画後半興味深いのは、予想もしない事態の悪化が続く中、オロオロするばかりのバカ弟ハンクと違い、アンディが見せる抜群の危機対応能力。その第1は、現場にボビーを放置したままほうほうの体で逃げ出したハンクからの聞き取り。指紋は拭いたか？ 誰にも見られてないか？ レンタカーの返還にトラブルはなかったか？ 等々、アンディの質問は実を的射たもの。もちろん、ハンクも指紋の拭き取りなどそれなりの処置はしたつもりだが、CDを置き忘れていたことからわかるように、ハンクの努力はどこか間が抜けている……。

最悪なのは、犯行当日の早朝、ハンクが実行犯ボビーを迎えにいった際ボビーの妹に顔を見られたうえ、「これから仕事に行く」という会話まで聞かれていることをアンディに報告しなかったこと。そんな風に、バカに限って自分に都合の悪い情報を隠してしまうから、危機を乗り切ることができないばかりか、事態を悪化させてしまうのは、昨今の日本のニュースで腐るほど見る風景……。

アンディの危機対応能力は？ その2

この映画後半は、ある意外な結末に向かってサスペンス性を強めていく。アンディが対応しなければならない第1の危機は、国税局の調査が進む中次第に明らかになっ

ていくアンディの会社のカネ使い込みの実態。母親の葬儀出席中のアンディに対して、その説明を求めて出社しろという再三の電話をアンディは無視し続けていたが、アンディはいつ、どんな決断を？

アンディが対応を迫られたもう1つの危機は、ボビーの義兄デックスからの“ゆすり”に対して、ハンクに代わってどう対応するかということ。アメリカは銃社会だから、本来銃に縁のないアンディがいつ銃に手を出すのかと興味をもって見守っていると……？

家族の危機 その1——妻とは？

冒頭の激しいセックスシーンは、あくまで一時的な幸せの回復にすぎず、アンディとジーナとの仲が既になかなりヤバイことはストーリー展開の中少しずつ明らかになっていく。そして、アンディの母親の死の中で見せる父親との確執、会社からの電話に対応しないアンディの姿、弟ハンクとの不審な電話の数々。妻に対して状況を全く説明しないアンディに対して、ジーナがある時キレたのは当然。こんな場合、一般的に妻がとる行動とは？

これだけなら多くの観客も「なるほど」と納得できる流れだが、シドニー・ルメット監督がすごいのは、ここでとてつもないインパクトのあるセリフをジーナに語らせたこと。「ネタばれご免」で紹介すれば、それは「兄と違って見かけカッコいい弟のハンクと、毎週浮気をしていた」という告白。さて、家を出て行こうとする妻からこんな告白を聞かされたアンディの対応は？

家族の危機 その2——父親とは？

さらにシドニー・ルメット監督は、父と息子の確執というテーマについて、すごい結末に向けた手を打っている。それは、宝石強盗の実行に向けてアンディがあらかじめ接触していた宝石故買商の男の前に、父親チャールズが現れたこと。何とこの2人は昔の知り合いだったというから驚きだ。

犯人逮捕のメドが全然立たない警察の捜査に業を煮やしたチャールズは、昔顔なじみだったこの男を訪れることにより、犯人割り出しのヒントを得ようとしたわけだが、そこで受け取ったのが何と長男アンディの名刺。こりゃ一体どういうこと？ ここから執念を見せる老齢の父親チャールズの追跡力は恐ろしいほどの迫力がある。そして、

デックスの家で起きた必然的ともいふべき発砲事件によって、瀕死の重傷を負ったアンディを病室に見舞うチャールズ。

何かひと波乱ありそうだと思ったのは私だけではないはずだが、そこに起きる驚愕の結末とは？ ちなみに、デックスのアパートからほうほうの体で逃げて行ったハンクは、今どこで何を……？

こりゃ必見！ さすがシドニー・ルメット監督！

この映画は117分というベストな時間の中で、サスペンス・スリラーとしての面白さの他、崩壊していく家族1人1人の人間の性^{さが}を冷徹に見せてくれる。そしてまた、シドニー・ルメット監督が描くアンディと弟ハンクとの確執、アンディと妻ジーナとの確執、アンディと父親チャールズとの確執模様は実に奥深く、その解決が不可能に近いことに思わずため息が出そう。そして、最後に示される2つのアツと驚く結末！

こりゃ必見！ さすがシドニー・ルメット監督！

2008(平成20)年9月19日記

ミニコラム

『おくりびと』狂騒曲——劇場には列が！

日本人は熱しやすく冷めやすい人種。また、マスコミ操作や大量宣伝に乗りやすい国民。それは、かつての「小泉劇場」への熱狂ぶりや①『花より男子ファイナル』、②『容疑者Xの献身』、③『相棒—劇場版—』など大量宣伝と結びついたTV局製作作品が大ヒットし、キネ旬ベストテンなどの良質な作品が単館上映されている姿をみればよくわかる。キネ旬2月下旬号によると、松竹配給の『おくりびと』は、東宝がベスト9位までを独占した08年邦画興

行収入ランキング11位で30億円だから大健闘。そんな『おくりびと』をアカデミー賞ノミネートを契機として凱旋上映した商魂のたくましさはお見事。その結果、受賞後の上映劇場には長い列ができることに。こりゃ一体ナニ？ 受賞にケチをつけるつもりはないし、マスコミ情報に頼ってはダメとは言わないが、それに踊らされず、少しは自分の目と耳で情報を収集し判断することも必要では？

2009(平成21)年3月2日記